

近世から近代初頭における紀州黒江の空間構成と漆器業

千森督子

和歌山信愛女子短期大学

Lacquerwork at Kuroe and structure of the town
Between the end of the Early Modern and the beginning of the Modern Age

Tokuko CHIMORI

Wakayama Sin-ai Women's Junior College

Summary

This paper describes the architecture of Kuroe in Kainan-shi, Wakayama Prefecture and features of its tradesmen's houses between the Edo and Meiji Periods, focusing on lacquerware, Kuroe's traditional business. The Horikawa River ran through the center of Kuroe, the town built by empoldering the Kuroushigata Cove, into the Kuroe Port. Planned sectioning is inferred from the findings that any one town block roughly coincided with a residential area within two blocks from the river in both north and south directions. Kuroe had blossomed into the town of lacquer work under the wing of the domain throughout the Edo Period. At the end of the Edo Period, wood-based manufacturers (kijishis) lived together in the clan's main estate (furuyashiki) located on the foot of Funoo-yama mountain while other manufacturers, such as lacquerware-coating artisans (nurishis) generally lived in the area between Nishinohama on the north side of the Horikawa River and Minaminohama on the south side of the river. From the end of the Shogunate toward the Meiji Period, houses of people in lacquerware-related businesses, with wholesalers as a mainstream, as well as the major buildings of the city and houses of the big powers of the community, stood in a row along the river, which gave the townscape its characteristic appearance.

Keywords : 黒江, 漆器, 問屋, 町構成, 堀川, 町並み

Kuroe, lacquerware, wholesalers, town construction, Horikawa River, streetscape

1. はじめに

和歌山県海南市黒江は、「黒江塗」漆器の産地である。江戸時代前期の俳諧書『毛吹草』⁽¹⁾には、紀州の特産品として「黒江渋地椀」が紹介され、江戸時代中期の『和漢三才図会』⁽²⁾にも、紀州の土産の項目に「椀(名草郡黒江)」が取り上げられている。さらに、江戸時代後期の『紀伊続風土記』⁽³⁾の物産部にも、「名草郡五箇荘黒江村にて、二百年以前より渋地椀及木具折敷類を製し出し諸国へ鬻く、今は國として至らざる所なく、其製最佳

好なり」と記されている。これらから、江戸時代初期にはすでに産業として確立され、中期から後期には黒江の漆器が広く諸国に出荷されるようになっていたことが窺える。

紀州藩は、椀製造地域を黒江一村に限定して漆器産業を保護した⁽⁴⁾。そのため、黒江塗は黒江の町の発展と空間形成に大きな影響を与えたと考えられる。

本稿は漆器業とともに発展してきた黒江の町に着目し、既往論文⁽⁵⁾で取り上げていない、近世から近代初

頭の漆器業の発展期における漆器生産と町の空間構成との関わりを明らかにすることを目的とする。

2. 江戸時代における町の発展と空間構成

(1) 町の発展

黒江の地は、船尾山と城ヶ峰、城山の三方を山に挟まれ東北から西部へと広がる地形であるが、『紀伊続風土記』には、「此の地古は海の入江にて、其干潟の中に牛に似たる黒き石あり、満汐には隠れ干汐には顕はる、因りて黒牛潟と呼ぶ、黒江とは黒牛潟の略語なり」とあり、古くは船尾山麓の南側は海が深く湾入した入江であったと推測される。

ここでは、黒江の発展過程を窺う史料として、江戸時代中期の寛保元年(1741)に記述された「名高浦四囲廻見」(以下、「四囲廻見」とする)⁽⁶⁾を紹介したい。「四囲廻見」は、名高浦にある専念寺の14世住職であった全長の著作で、名高浦周辺の村々の状況を記述している。全長は各村に足を運んで調査する傍ら、『万葉集』や『和漢三才図会』などの文献を引用して村名の起源や地名を考察している。後者については史料批判が十分ではなく、文献については鵜呑みにできない部分があるものの、街道や村々の往還路などは周辺の景観と関連づけて描写しており、現在の地形や道路を基準として、当時の様子を推測することができる貴重な史料である。その「四囲廻見」には、黒江の成立に関して次のような記述がある。

証如の黒江の御堂へ整居ありし八天文元年とあれは、今寛保元年より八二百拾年はかりも以前の言なり(中略) 其昔八、此庭堂の前などにて、南よりつゝらおりの細道ある八村より参詣の道にてやありけん。夫より後、村も次第に繁昌して家数も多くなり。只今御堂のある山の麓なども昔八海辺にて少々人家ありしならん、人家の多く出来たりし八、正保年中よりの事なりと云へ八、いまた百年に八及八さる事なりと云。五ヶ庄よりの出村にて、入江を埋め立てた後、多く人家を立て、黒江村と八名付けしなり、往古の事八しらす。

黒江では、入江奥の船尾山麓付近に早くから集落が形成され、14世紀には中言神社が広原村より勧請され、さらに天文元年(1532)には中言神社の西に西本願寺御坊(浄国寺)が移されている。全長は、御坊の移転によって船尾山麓に集落が開け、その後、黒牛潟の干潟を埋め立て、正保年中(1644~48)には黒江の町場が形成されたと推測している。

埋め立てによる町場の形成は、漆器業の発展と関連があると考えられる。黒江で渋地椀が作られるようになっ

た時期は明確ではないが、塗師方に関する最古の史料である「塗師中之帳」⁽⁷⁾に収録された寛永2年(1625)の書上げには40人の塗師名が、次いで寛永14年と推定される書上げ⁽⁸⁾には80人の塗師名が記載され、漆器業の発展の過程を窺うことができる。さらに、寛永15年の年紀のある『毛吹草』に、紀州の土産に取り上げられていることから判断すると、すでに、江戸時代前期には黒江の渋地椀が特産品になるまでに発展していたことがわかる。こうした漆器業の発展に伴い、船尾山麓の地だけでは手狭となり、正保年中(1644~48)に入江を埋め立て、南、西に町場を拡大したと推測される。埋め立ての経緯は明らかではないが、元和8年(1622)に地主⁽⁹⁾となった尾崎家⁽¹⁰⁾所蔵の文書には、延宝9年(1681)に城山北の池崎に屋敷を普請した記録(写真1)があることから判断して、遅くとも17世紀後期には、町域が池崎の地まで広がっていたことがわかる。天明3年(1783)の「黒江村塗師方等仲間控」⁽¹¹⁾では、147軒の塗師方の名前が字別に分類されているが、新たに埋め立てられた地にも塗師が住み着き、漆器を生産していたことがわかる。



写真1 尾崎家文書

(2) 町の空間構成

江戸時代の黒江における町場の構成や地形にふれた史料として、文化9年(1812)に発行された『紀伊国名所図会』⁽¹²⁾がある。同書の名草郡黒江村の項には次のように記されている。

村中小名六に分かる、北を北の町といひ、南を南の濱といひ、西を西の濱といひ、乾を古屋敷といひ、巽を市場町といひ、東を室山といふ。

当時は、北の町、南の濱、西の濱、古屋敷、市場町、室山という6つの小字に分かれていることがわかる。

また同書の挿図に、「大野日方全図」(図1)と「黒牛潟、中言社、黒江御坊」(図2)がある。「大野日方全図」には黒江の全景が描かれている。町は北(絵図中に北の方向が北と表示)と南、東の三方を山に囲まれ、町の中央には堀川が東西に流れ、西端は池崎の地で海に及んで



図1 江戸時代中期の黒江村周辺図
 (『紀伊国名所図会』所収「大野日方全図」抜粋)



図3 明治時代中期の黒江村周辺図
 (『明治前期関西地誌図集成』掲載仮製地形図に小字名等記入)

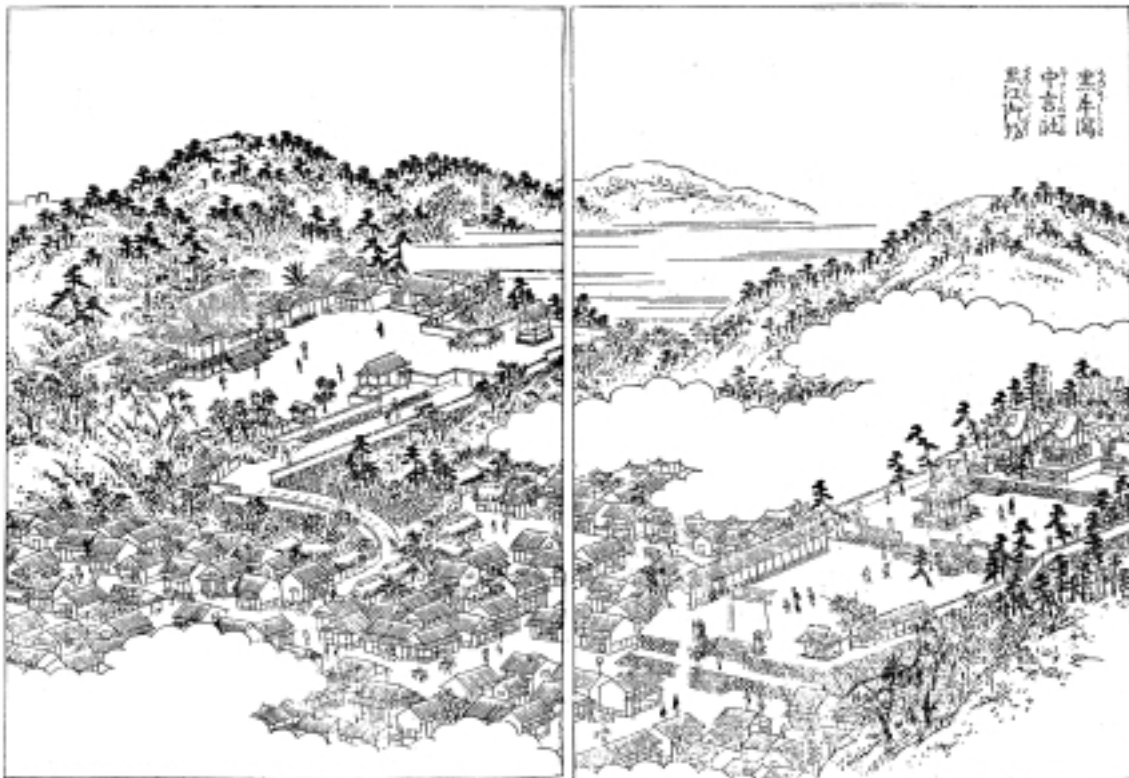


図2 「黒牛湯 中言社 黒江御坊」
 (『紀伊国名所図会』)

いる。船尾山麓の「宮(中言神社)」や「御坊(浄國寺)」から堀川までは家屋が密集している。町域はさらに堀川から城山に至り、他方、町の東端は熊野街道の一里塚から日方に通じる黒江坂まで広がっていることがわかる。なお、同書のもうひとつの挿図である「黒牛湯、中言社、黒江御坊」は中言神社と御坊(浄國寺)と門前の古屋敷地区を描いたものである。

ところで、「大野日方全図」は概略図であるため、正

確な地形や道路、街区構成を知るために、明治中期に参謀本部陸軍部測量局が製作した「仮製地形図」を参考図として掲出し、小字名等を記入しておいた(図3)⁽¹³⁾。同図の段階では船尾は埋め立てによって地域が広がっているが、黒江そのものは図1と比較してもほとんど変わらない。東北部の北の町付近は、城山、城ヶ峰の山々で挟まれた形で、道⁽¹⁴⁾の両側に線状に街区が構成されている。その西部には、扇形に古屋敷の地が船尾山麓か

ら広がっている。堀川の南、黒江坂の登り口の市場町付近は小路で細分化されている。船尾山麓と城山で挟まれた西の濱、南の濱は広域に及び、平行四辺形の比較的均一の街区割で、自然発生的なその他の地域とは異なる様相を呈していることがわかる。

ここで、寛保元年(1741)の「四圍廻見」に道路や町場の構成が細かく描写されているので、以下に紹介しておきたい。

尾崎氏の宅より北なる橋のある堀の所八、堀に添て左右に東へ行く道両かわにありて、皆町作りたる人家立ちならへり、東へ行て八堀爪の所熊野往還の西かわにて市場のすこし北へ出るなり、又城山の麓なる道より南北への通路八、東は市場よりの往還筋、西は尾崎氏の前なる毛見・舟尾への道にて、其間に城山の麓より南北へ通りたる道二筋ありて、二筋ともに堀に八橋をかけてあるなり 此外人家の多き村なれ八小路々々八多けれとも、遂一に八しるされず(後略)

前述の城山北に延宝9年に普請した尾崎家の屋敷は町の要に位置し、堀川の両側には「町作りたる人」、すなわち黒江の開発に関与した有力町人が軒を連ね、堀川が町の中心街であることがわかる⁽¹⁵⁾。町場は、堀川の東端を走る熊野街道から、西端の池崎にある尾崎家前の土堤道までの間に、北に2筋道が城山の麓から通り、堀には橋が架けられていた。また、同書には、「熊野街道には市場より北の端まで左右大形町間ならびに家立ちならへり、街道の西かわには後に人家多くある故に、所々に小路多くあるなり」とあり、熊野街道でも黒江坂の登り口の市場町付近から北の町は両側に人家が建ち並び、とりわけ西部は小路によって分割され、家屋が密集していたことがわかる。

3. 黒江塗の生産と流通関係者の居住地

黒江塗の産業構造に関する先行研究としては、池浦正春の「黒江漆器企業の史的的研究」及び「在町工業黒江漆器業の近世発達史」⁽¹⁶⁾、冷水清一の『海南漆器史』⁽¹⁷⁾があり、その後、池浦正春は「紀州漆器業発達史」(『紀州漆器のあゆみ』⁽¹⁸⁾所収)をまとめ、さらに『海南市史』⁽¹⁹⁾にも漆器産業に関する章が設けられている。これらの研究成果によって、近世の黒江における漆器業の発達過程を概観しておきたい。

江戸時代初期における黒江塗の生産は、「塗師方風呂元」が親方となり、轆轤をひいて木地をつくる木地師と椀木地に漆を塗って椀を完成させる塗師の両方を配下に抱えていた。しかし江戸時代中期になると生産工程が分

業化され、木地師と塗師屋の分業制に発展した。この頃、渋地椀の生産は藩の産業保護策によって黒江村のみに限定されるようになっていた。

一方、黒江塗の流通は、江戸時代前期には地元で商人組織がなく、大坂、京都や四国、瀬戸内から来た買付商人による塗師屋での直買いが行われていた。黒江塗の最大市場は上方と江戸であったが、享保年間(1716~1735)には、上方積仲間の前身の同業者仲間も発生したとされる⁽²⁰⁾。当初は塗師方加入の間屋が関わり、その多くは塗師と木地師を自家で抱えた風呂元であったが、生産量が増えるにつれて卸商を専門とする椀買次間屋が独立・分化し⁽²¹⁾、さらに江戸時代後期の文政8年(1825)には江戸積株仲間も組織された⁽²²⁾。

こうして、江戸時代後期における黒江塗は、生産と流通に大別され、生産はさらに塗師屋と木地屋に分業化されていた。

黒江の町の構成と漆器業との関係については、『海南市史』第2巻の「黒江村」の項⁽²³⁾に概要が記述されているが、その考察は十分ではない。そこで、生産と流通に大別して、江戸時代における職分と居住地区の関係を検討したい。

(1) 塗師方・木地師の居住地

江戸時代前期の「塗師中之帳」では塗師方の居住地は掌握できないが、江戸時代中・後期の「黒江村塗師方等仲間控」をみると、字別に塗師方の名前がまとめられており、居住地の特定と分布傾向が把握できる。それによると、天明3年(1783)には西の濱52軒、南の濱43軒、北の町・古屋敷・市場町で52軒、合計147軒、寛政7年(1795)には、西の濱64軒、南の濱36軒、北の町4軒、古屋敷23軒、市場町16軒、合計143軒となる。黒江村のなかで、農業地域の室山を除く5つの字に居住しているが、その中でも、西の濱(4割)と南の濱(3割)に集住する傾向が読み取れる。

参考までに、江戸時代における黒江の家数と人口は、享保4年(1719)に家数870軒、人口3,660人(「日方組大指出帳写」⁽²⁴⁾)、天保10年(1839)刊行の『紀伊続風土記』には家数868軒、人口3,698人とあり、この100年間に大きな変化はない。当時の塗師屋は150軒であるから、黒江の家数の2割弱を占めており、黒江塗が大きな産業になっていたことが窺える。

つぎに、木地師の居住地区についてみておきたい。黒江の木地師は「氏子駈帳」に登場し、享保5年(1720)には合計30人の木地師があげられている⁽²⁵⁾。その後、安永3年(1774)には34人⁽²⁶⁾、寛政9年(1797)には30人⁽²⁷⁾と安定的に推移しているが、安政3年(1856)にな

ると100人に増え⁽²⁸⁾、慶応3年(1867)では96人が確認でき⁽²⁹⁾、江戸時代後期になって急増している。このような変化は、木地師の組織化が進んだことと、文政9年(1826)に堅地厚塗板物漆器が開発され、それ以後、板物漆器木地を作る木地師が急増したためと考えられる。

木地師の居住地は先に紹介した安政3年「紀州黒江木地職名前之帳」で判明する。同帳によると、古屋敷41(38)人、西の濱23(21)人、南の濱16(12)人、北の町13(11)人、市場町7(7)人で、合計は100(89)⁽³⁰⁾人になる。各字に広く分散しているものの、古屋敷に4割が集まっていたことがわかる。

限られた史料であり、塗師方と木地師の史料には半世紀の開きがあるが、江戸時代中・後期には、黒江塗を生産する塗師方は西の濱から南の濱に、木地師は船尾山麓の古屋敷に多く住む傾向がみられた。他方、交易の場として賑わった市場町や熊野街道が通る北の町は、黒江塗の生産関係者の居住は少数であったことがわかる。

(2) 問屋の成立発展と居住地

つぎに、黒江塗の流通に関与した卸問屋について検討したい。寛保元年(1741)の「四圍廻見」に、「此売買に村の内に問屋の二、三軒もあるなれ八、襦きりこきりもむつかしからず、され八近村の浦辺より八舟に積行き、国々に商すれば、これも又我がため、人の為となる(後略)」とあることから、問屋は比較的少なかったことと、販売は海上輸送に頼っていたことがわかる。その後、明和2年(1764)には梶買次問屋株が紀州藩から許可され⁽³¹⁾、幕末の嘉永2年(1849)における黒江村梶買次問屋仲間⁽³²⁾は24軒の問屋から成り、そのうちの11軒の居住地が判明する。堀川沿いに8軒の問屋が屋敷を構え、ほかに北の町に常行司の松屋清蔵が、南の濱に絵屋作兵衛、冷水屋与兵衛が居住した(表1)。

江戸への出荷⁽³³⁾は、天明・寛政年間(1781~1800)に江戸積商人が株仲間を組織し、文政8年(1825)には11軒の問屋に鑑札が下付された。その後、再編成されるが、嘉永4年(1851)の11軒のうち土佐屋五郎兵衛、川端六左衛門、岩出屋平兵衛⁽³⁴⁾、松屋清蔵、保田茂右衛門、冷水屋与兵衛の6名は梶買次問屋でもある。表1にあるように、黒江村8軒のうち5軒の所在地が明らかになり、そのうち3軒が堀川沿いに屋敷を構えていた。

他方、木地の製造工程に関わる木地屋の組織も分化し、材料を扱う木地問屋が出現し、明和2年(1764)には木地問屋株が藩から公認された⁽³⁵⁾。江戸時代中・後期の木地問屋の変遷をみると、元文5年(1740)は6軒⁽³⁶⁾であるが、安永3年(1774)に8軒⁽³⁷⁾、寛政9年(1796)に9軒⁽³⁸⁾、慶応3年(1867)には9軒⁽³⁹⁾となり、10軒に満

たない問屋が独占していた。黒江以外に日方、名高の問屋も含まれているが、慶応3年の9軒のうち黒江が5軒、日方、名高が各2軒である。黒江では表1にあるように、黒江村梶買次問屋仲間に属する才賀栄十郎、川端六左衛門、岩出屋平兵衛、絵屋作兵衛が黒江木地問屋を兼営している。そのうち3軒が堀川沿いに屋敷を構えていた。

表1 江戸時代末期問屋一覧表

黒江村梶買次問屋仲間 嘉永2年(1849)	江戸積株仲間 嘉永4年(1851)	黒江木地問屋 慶応3年(1867)
川端六左衛門(川端通り)	川端大左衛門(川端通り)	川端六左衛門(川端通り)
妹背次郎四郎(川端通り)		
絵屋作兵衛(南の濱)		絵屋作兵衛(南の濱)
絵屋重蔵		
冷水屋与左衛門(南の濱)	冷水屋与左衛門(南の濱)	
岩出屋平兵衛(川端通り)	岩出屋平兵衛(川端通り)	岩出屋平兵衛(川端通り)
内原屋多助		
平野屋平次郎(川端通り)		
保田茂右衛門	保田茂右衛門	
岩出屋吉兵衛		
泉屋清助		
備前屋喜四郎		
才賀栄十郎(川端通り)		才賀栄十郎(川端通り)
土佐屋五郎兵衛(川端通り)	土佐屋五郎兵衛(川端通り)	
絵屋武兵衛		
菱屋新九郎		
山東屋藤兵衛(川端通り)		
松屋清蔵(北の町)	松屋清蔵(北の町)	
備前屋宇助		
岩出屋由兵衛(川端通り)		
名手屋茂兵衛		
菱屋庄兵衛		
亀甲屋作兵衛		
黒田屋兵左衛門		
	扇屋篤之丞	糸我屋藤兵衛
	漆屋秀松	
	木村兵右衛門【鳥居】	
	和田屋久七【日方】	
	伏見屋藤三郎【名高浦】	

※ 所在地の特定は『海南市黒江「川端通り」の百年』と柳川和一郎氏、松田家の聞き取りによる。

()は黒江内小字名、【 】は黒江以外の地名、地名無記入は不明

表1の黒江村梶買次問屋仲間、江戸積株仲間、黒江木地問屋を概観すると、居住地が明確な11軒のうち8軒が川端通りにあり、南の濱、北の町は少数であることから、問屋は堀川沿いに集まる傾向があり、塗師屋やその他の職人宅とは地域的な住み分けが行われていったと考えられる。とりわけ、3つすべてを兼ねる川端六左衛門家と岩出屋平兵衛家はいずれも川端通りに店を構えていた。2つを兼ねる5軒のうち2軒は川端通りにあった。彼らは黒江の生産や経済面のみならず、庄屋や大庄屋をも務める⁽⁴⁰⁾など地域社会の実力者であったと考えられる。江戸時代末期に堀川沿いに主要な漆器問屋が位置していたことは、漆器業と町の空間構成を考える上で注目すべき点である。



図4 明治19年黒江村村図（海南省所蔵・柳川和一郎氏写真提供）

4．近代初頭の町割と宅地割

黒江の中心に位置する矩形地域は、西の濱、南の濱からなる。ここは江戸時代を通じて漆器業の中心地区であったが、その詳細な町割と宅地割を分析するために、明治19年（1886）の「黒江村村図」（海南省所蔵・図4）を紹介したい。

同図をみると、堀川西端には荷揚げ場が北（695番地）と南（694番地）の2箇所に設けられ、その南には江戸時代の初期に屋敷を構えた、尾崎家の大規模な屋敷地（698番地）が位置している。

堀川には橋が3箇所に架けられ、町場は堀川を軸に南（南の濱）北（西の濱）に二分され、両地区共に堀川に平行に東西に配される3本の道（通り）と、これらに交差する北西から南東の主に4本の道（筋）によって町割が行われている（以下、この地域の東西の道路を「通り」、南北の道路を「筋」と称する）。これらの構成は、先に引用した「四囲廻見」の描写とほぼ符合しており、江戸時代の町割を伝えることがわかる。

整然とした道路網で街区割りが行われているが、南の濱は2通り目から細かく分割され、両地区共に山裾に近い3通りは、地形の制約を強く受けた、変則的な形態となっている。そのために、2通り目、3通り目は、不整形で、小規模な宅地割になっている。他方、川端通りから

南北共に2つ目の街区までは比較的均一で、1街区を東西方向に7分割、南北方向に2分割した規模である。1街区は東西約40間、南北約15間半であるので、間口5間半、奥行7～8間が1屋敷の平均的規模である。

川端通りに面する敷地は、裏通りに至る2区画を占めるものが多い。しかし、中にはさらに規模の大きな敷地がある。川端通り西端の693番地は、柳川家（旧岩出屋



図5 旧岩出屋敷旧地番略図
（『重要文化財旧柳川家住宅（主屋・前蔵）・旧谷山家住宅移築修理工事報告書』より）

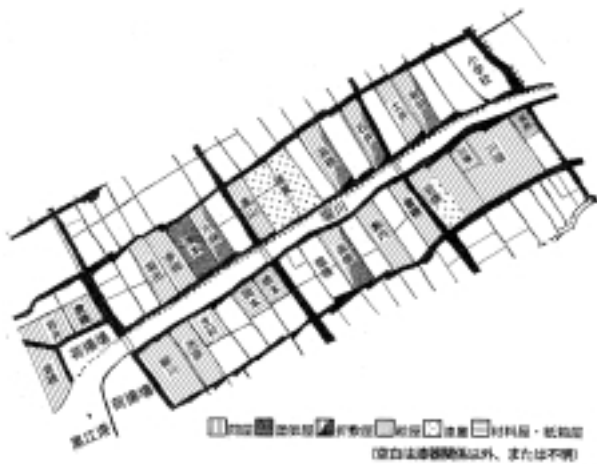


図6 明治時代中期川端通り漆器関係家屋職種別分布図

平兵衛家)の屋敷地であるが、ここで当家の屋敷の変遷を図5⁽⁴¹⁾からみていきたい。

岩出屋は、享保13年(1728)の初代の時に、堀川から2つ南の884番地⁽⁴²⁾の土地を親から譲り受け、3代目から同地で漆器商を営む。4代目の文化4年(1807)に844番地とそれに続く南の846番地の2区画を購入し、川端通りから中の丁に至る地所とする。そのために、それ以前は半分の屋敷規模であった。5代目の天保5年(1834)に、妹背次郎四郎家所有の西隣の845番地と、中の丁を挟んだ南側の883番地の土地と蔵を購入し、大規模で、荷揚場に面する好立地の屋敷構成となる。岩出屋は、嘉永4年(1851)に妹背次郎四郎家の江戸積株仲間の鑑札を入手し、黒江でも屈指の問屋となるが、屋敷拡大と漆器問屋としての繁栄との関わりが窺える。

柳川家以外に、657番地(旧川端家)716番地(旧才賀家)の敷地も大きい。また、2通り目、3通り目にも681番地(旧絵屋、現池原家)603番地(旧冷水家)などの大規模の屋敷地がある。いずれも江戸時代に大店の漆器問屋であった地所で、681番地の池原家は、江戸時代後期の享和元年(1801)⁽⁴³⁾に東側を拡大して、座敷棟を主屋に隣接して増設している。その他の家屋も、江戸時代後期に敷地を拡大したものと推測される。

5. 近代初頭の堀川沿いの家並み

明治時代になっても、木地の搬入や漆器の搬出などは、水路と海上輸送に頼っていた。堀川は黒江の動脈であった。そこで、最後に、明治10年代から20年代初頭の堀川沿いに町並みを構成していた家屋について、漆器業の発展、変化とも関連させながらみていきたい。

先に紹介した、明治19年(1886)の「黒江村村図」によると、北側は23筆、南側は19筆に区分されていた。図

6⁽⁴⁴⁾は堀川沿いの抜粋部分に、漆器関係家屋を職種別に表したものである。家業が明確な30筆のうちの28筆(雑賀家、高橋家、川端家は2筆所有)は漆器関係家で、その6割の16筆(兼営も含む)は問屋である。問屋層が輸送の便の良い堀川に面した場所に町並みをつくっていた。

江戸時代末期の代表的な問屋組織(表1)のなかで、川端通りに位置していたことが明らかにされた8軒の内、5軒(川端六左衛門家、柳川平兵衛家(旧岩出屋)、土井家(旧土佐屋)、岩井由兵衛家(旧岩出屋由兵衛家)、藪内家(旧平野屋))が引き続き漆器問屋を営み、雑賀家(旧才賀家)は漆問屋となる。また、妹背次郎四郎家屋敷地は柳川家の、山東屋藤兵衛家屋敷地は漆器問屋の倉橋藤三郎家の所有となり、いずれも漆器の流通に関わっていた。他方、明治以降になり川端通りに進出してきた問屋がある。そのなかでも、池原庄五郎家は経緯が明らかで、明治初期に絵屋作兵衛家から分家して、塗師方の安原屋権太郎家跡で漆器商を始める。前述した681番地の本家の屋敷拡大を考え合わせると、江戸時代末期からの一族所有地の拡大過程が窺われる。

黒江の漆器は、国内だけでなく海外へも市場を拡大していくようになり、輸出漆器を扱う問屋も増加していくが、江戸時代以来の問屋の堀田家(旧香具屋)が輸出漆器問屋となり、また、藪内家(旧平野屋)は伊予問屋⁽⁴⁵⁾を営み、問屋も分化していった。

黒江塗の発展に伴って役割が大きくなった材料店は川端通りには3軒(4筆)あり、江戸時代末期からの柿波屋の岡本栄助家に加えて、大店の漆器問屋であった雑賀家(旧才賀家)が漆問屋を営むようになる。さらに、江戸時代末期に漆精製業が創業されるが、その先駆者であった岩橋新次郎家は、漆精製業と漆器問屋を兼営する。

折敷業⁽⁴⁶⁾も明治年間には確実な発展を遂げ、江戸時代末期からの高橋伝四郎家(元黒松屋伝兵衛家)以外に、元庄屋であった小林伴助家⁽⁴⁷⁾も含め、折敷製造家は4軒(5筆)あった⁽⁴⁸⁾。高橋家は、堀川向かいに、折敷製造業を営むための木地蔵をもっていた。他方、意匠の分野も、明治12年には沈金意匠法を導入するなど技術開発が行われ、絵屋は輸出漆器とも関連して増加していく。川端通りでは2軒あり、海外輸出漆器向けの蒔絵師、堀部政次郎家が東端に位置した。また、江戸時代末期に塗師方仲間員であった安原屋半右衛門家が絵屋の橋本半次郎家となる。

家並みの近代化を捉える上で、漆器以外では米に関わる建物に注目したい。米は江戸時代には、年貢とも直結していたが、堀川の北側東端には紀州藩の御蔵が配され

ていた。御蔵は近代になると用を果たさなくなり、明治9年に黒江小学校が跡地に開設され、蔵内にあった行政機関は中言神社内に移された。なお、明治時代後期には、船尾の河内浜塩田の埋め立てにより町場は西側に拡大し、同小学校は明治25年に船尾に移転し、その跡地に第四十三銀行が開設した。他方、堀川南側で江戸時代から米穀屋を営んでいた^{そらい}徂徠家は、明治38年に黒江郵便局を家屋内に併設する。川端通りには漆器関係以外に近代の重要な施設が軒を並べていった。

明治時代後期の堀川西側からの写真(写真2)⁽⁴⁹⁾をみると、本瓦葺き屋根に庇をもつ2階屋や蔵が建ち並ぶ家並み景観と共に、堀川の様子が窺われる。川幅約3間の堀川の両側には道路が沿い、道幅も含めると約6間の大規模な通りが写し出されている。その他の通りが約1間幅の路地であることから考え、川端通りは別格の通りであったことがわかる。



写真2 明治時代の川端通り(船津写真館提供)

6. おわりに

黒江塗の産地である和歌山県海南市黒江は、埋め立てにより形成された町場で、町の中央を東西に流れる堀川は海上輸送と直結し、江戸時代前期には町場はすでに、堀川西端の池崎の地まで広がっていた。

江戸時代を通じて漆器の町として発展していったが、当時の様子は文化9年(1812)刊の『紀伊国名所図会』に、「此地専ら渋地椀を拵へることを所作として四国西国路及び関東迄もあきない海陸の便よし、工商軒を連ねて錐を立つ間もなく繁盛富饒の地なり」と記されていることからわかる。江戸時代中・後期の黒江は、塗師屋を中心とする生産体制から、木地屋が分化し、新たに商人組織もでき、職種により居住地に偏りがみられるようになる。木地屋は船尾山麓の古屋敷に、塗師屋は西の濱から南の濱に、そして漆器問屋は堀川沿いに集中していた。

堀川を軸に南北に広がる西の濱および南の濱は町の中心

心地区であるが、堀川から2通り目までは町割も宅地割も比較的均一で、計画的な空間構成である。埋め立て当初は一定規模で区画されたと考えられるが、江戸時代末期の間屋の拡充期には、隣接地を入手して拡大した、規模の大きな屋敷地をもつ問屋がみられた。

とりわけ、堀川に面する屋敷地は規模が大きく、裏通りにまで至るものもあった。敷地の大きさは資本力の、立地条件は社会的地位の現れと考えられるが、川端通りの屋敷はその両方を兼ね備えていたことになる。

明治時代の川端通りは、江戸時代以来の漆器問屋が営業する傍ら、新興の輸出問屋や伊予問屋へ転向する家屋もあり、さらに、漆屋、折敷屋、絵屋の参入もみられ、近代化の波にも対応しながら漆器業の中心街を築いていった。そのために、江戸時代から明治時代にかけて、黒江の町は漆器の生産と流通の諸段階に応じながら、漆器業と連携した特徴的な空間構成を築いていったといえる。

註および文献

- (1) 『毛吹草』(松江重頼編纂)は正保2年(1645)刊であるが、自序に寛永15年(1638)の年紀があるため、すでに17世紀前期には黒江塗が紀州の特産品になっていたことがわかる。
- (2) 『和漢三才図会』(寺島良安著)の発行年は明確ではないが、正徳2年(1712)の年紀がある。
- (3) 『紀伊続風土記』(仁井田好古編)は、文化3年(1806)から天保10年(1839)にかけて編纂された。
- (4) 江戸時代後期、嘉永6年(1853)の「塗師方定書」に、「御国産渋地椀之儀者往古より黒江一村に限り…」との記述があるが、年代を特定する史料は確認されていない。(和歌山県立海南高等学校池浦正春代表:「黒江漆器企業の史的研究」17、(1959)所収)
- (5) 白木小三郎・千森督子「漆器の町 - 黒江におけるその構成と機能」『民俗建築』71号(1976)、千森督子「漆器の町 - 黒江における町割りの家並み」『民俗建築』86号(1985)、千森督子「黒江」『歴史の町なみ 近畿篇』日本放送出版協会(1982)、千森督子:「漆器の町・黒江 住民意識を中心とした考察」『信愛紀要』25号(1985)、白木小三郎・千森督子『黒江の町並みと町家』観光資源保護財団調査報告書第12号(1984)、千森督子「歴史的町並み海南市黒江の保全・修景に関する基礎研究」『平成9年度わかやま学研究成果報告書』(1999)、千森督子『街道の日本史35、和歌山・

- 高野山と紀ノ川』吉川弘文館、22～30（2003）
- (6) 「名高浦四囲廻見」(海南市史編さん委員会：『海南市史』第2巻、海南市、788～799（1990）所収)
- (7) 文書「塗師中之帳」(藪内家所蔵)による。(海南市史編さん委員会：『海南市史』第4巻、海南市、484～488（1997）所収)
- (8) 年号は記入されていないが、丑年であり、前の文書が寛永2年で、次の文書が正保3年であることから、寛永14年と推定される。
- (9) 「六十人地土」は、初代藩主徳川宣頼が徳川家入国以前から勢力を持っていた郷土や土豪を60人選定し、侍身分で取り立て地方統轄の要とした制度である。
- (10) 当家は、「元和八年被召出地土六十人者姓名」(『南紀徳川史』11)に尾崎次左衛門として挙げられている。尾崎家の家柄に関しては、『紀伊続風土記』巻19、名草郡黒江の項にも詳細に記述されている。
- (11) 海南市史編さん委員会：『海南市史』第4巻、海南市、520～525（1997）
- (12) 『紀伊国名所図会』(高市志友編、文化9年（1812）)同書は紀伊国の寺社・旧跡・景勝地などの来歴を实景描写の挿絵と平易な解説文で紹介した案内地誌書であり、挿絵は『木曾路名所図会』や『都林泉名勝図会』を描いた西村中和が担当したもので、絵画としての鑑賞にたえるだけでなく、名所案内としての役割を果たし、地理や生業に関する説明図となっている。なお、黒江周辺を描いた絵図として、慶応3年（1867）10月作成の『日方組地図』(柳川家所蔵)がある。『大野日方全図』と比較して、地形的には相違はないが、道が朱色で明記され、新熊野街道や城山南の池崎を経て堀川西端から船尾に至る道が主要な陸路であったことが知れる。
- (13) 図3は、『明治前期関西地誌図集成』(地図資料編纂会編、柏書房（1989）)の掲載図に、小字名などを加筆したものである。小字名の表記は、近世のものを用いる。
- (14) 北の町から市場町の黒江坂を通り日方に出る道は、明治16年（1883）に近世の熊野街道に沿って改修されている。
- (15) 堀川沿いの道は、いつ頃からかは明らかではないが、「川端通り」と呼ばれている。本稿でもその呼称を用いる。
- (16) 和歌山県立海南高等学校池浦正春代表：「黒江漆器企業の史的研究」(1959) 池浦正春：「在町工業黒江漆器業の近世発達史」、『海南市史研究』第5号、38～79（1980）
- (17) 冷水清一：『海南漆器史』、光琳社（1975）
- (18) 和歌山県漆器商工業協同組合創立100周年記念誌編集委員会編：『紀州漆器のあゆみ』、5～67（1986）
- (19) 海南市史編さん委員会：『海南市史』第1巻通史編、海南市、410～419、490～519（1994）第2巻、221～226、367～401、601～638（1990）
- (20) 前掲（18）9～10
- (21) 前掲（18）21～22
- (22) 海南市史編さん委員会：『海南市史』第1巻通史編、海南市、512～517（1994）
- (23) 海南市史編さん委員会：『海南市史』第2巻、海南市、221～226（1990）
- (24) 「日方組大指出帳写」(亀井家文書、『角川日本地名大辞典 30和歌山県』、404（1985）)
- (25) 「筒井八幡氏子駟帳」(前掲（17）15～16ペ - ジ所収)
- (26) 「筒井八幡氏子駟帳」、前掲（17）19
- (27) 「君ヶ畑氏子駟帳」、前掲（17）32～33
- (28) 「筒井八幡氏子駟帳」、海南市：『海南市史』第4巻、542～543（1997）
- (29) 「筒井八幡氏子駟帳」、前掲（17）22～24
- (30) 親子や兄弟、弟子関係も含まれるので、()内はそれらを差し引いた数である。
- (31) 前掲（18）21
「椀買継問屋」と記述されている文献もあるが、本稿では「椀買次問屋」に統一する。
- (32) 海南市史編さん委員会：『海南市史』第1巻通史編、海南市、510（1994）
- (33) 上方へは黒江、日方の買次商を兼営する塗師屋や専門の塗師問屋により出荷されていたが、上方積株仲間の史料が欠落して、実数は把握できない。また、天保初年頃には、江戸市中以外の江戸田舎と関八州（武蔵・相模・上野・下野・常陸・上総・安房）への出荷に携わる「持下り商人」と呼ばれる商人が出現するが、江戸積株仲間問屋以外の買次問屋や塗師屋であった。漆器業の有閑期にあたる夏場の出稼ぎから始まった零細なものであった。幕末には私的な商人仲間も形成され、直接、回船で出荷するものも現れるが詳細は明らかでない。
- (34) 文書によっては、「岩手屋」の表記を用いるが、本稿では「岩出屋」に統一する。
- (35) 前掲（17）17

- (36)「筒井八幡氏子駟帳」、前掲(17)、17
- (37)「筒井八幡氏子駟帳」、前掲(17)、19
- (38)「君ヶ畑氏子駟帳」、前掲(17)、32~33
- (39)「筒井八幡氏子駟帳」、前掲(17)、22~24
- (40)土佐屋五郎兵衛家は元禄14年(1701)から正徳元年(1711)まで、川端六左衛門家は文化3年(1806)岩出屋平兵衛家は慶応2年(1866)から同3年まで庄屋を務めた。(『百年史黒江』、黒江小学校創立百周年記念事業実行委員会編、56~57、1976)
- (41)社団法人和歌山県文化財研究会：『重要文化財旧柳川家住宅(主屋・前蔵)旧谷山家住宅移築修理工事報告書』16~22(1971)
- (42)明治19年の「黒江村村図」の地番と、江戸時代の地番は異なる。
- (43)東側の家屋の棟にある鬼瓦の銘が、享和元年であることから推定される。
- (44)図6は、「黒江村村図」の宅地割図に、『海南省黒江「川端通り」の百年』(柳川和一郎著、2003)、『海南省史』、『海南漆器史』、『和歌山県下諸商独案内』(明治中期頃の出版と推定。海南省所蔵)、『黒江町郷土史』(和歌山県黒江商工学校編、1930)、『百年史黒江』(黒江小学校創立百周年記念事業実行委員会編、1976)などの文献や聞き取り調査結果から、家業を考察し、著者が作製したものである。
- (45)伊予商人は、年に2~4回、伊予から船を仕立てて、厚木の椀素地を運び、7日~1ヶ月近く滞在し、漆器を買い付けて帰路につく。黒江漆器と伊予商人との関係は、宝暦年間(1751~61)と考えられ、伊予商人は当初、船で寝泊まりしていたが、取引のために伊予商人を宿泊させる問屋が出現する。これらの問屋は、「伊予宿」、「伊予問屋」と呼ばれ、嘉永2年(1849)に日方浦の3軒の塗物買付問屋を指定する制度ができる。黒江では、藪内家が最初の伊予問屋となる。伊予商人は大正8~9年に最盛期を迎えるが、大正中期以降は次第に衰退し、昭和17年を最後に姿を消し、伊予宿も廃業する。
- (46)折敷屋は、椀製造の塗師方とは別組織で、宝暦10年(1760)に紀州折敷株仲間が公認され、黒江15軒、日方15軒、名高2軒、計32株で組織され、幕末の文政頃(1816~1829)に34株に増加する。その仲間の一員、黒松屋伝兵衛家は川端通りに所在していたことが、『海南省黒江「川端通り」の百年』から明らかにされる。
- (47)小林伴助家は、文政8年(1825)から嘉永2年(1849)まで庄屋を務めた。(『百年史黒江』、57)
- (48)明治11年の「折敷下職調帳」には、黒江、日方で30軒の折敷屋の下職の状況が記されているが、高橋伝四郎家、小林伴助家、石井伊三郎家、在田芳兵衛家が名前を連ねている。(海南省史編さん委員会：『海南省史』第5巻、海南省、107~115(1997)、所収)
- (49)堀川が暗渠になるのが大正中期であるので、それ以前の日清または日露戦争の戦勝記念時の写真と推定される

近世から近代初頭における紀州黒江の空間構成と漆器業

千森督子

要旨：本稿は、和歌山県海南省黒江の伝統産業である漆器業に焦点をあて、江戸時代から明治時代にかけての、町の空間構成と町家の特性を明らかにするものである。

黒江は黒牛瀧の入江を埋め立てて出来た町で、町の中央には堀川が流れ、黒江の港に通じていた。堀川をはさんで南北共に2街区までは、街区と宅地が比較的均一で、計画的に町割が行われたことを思わせる。黒江は江戸時代を通して藩の保護を受けて、漆器生産の町として発展するが、江戸時代末期には、木地屋は船尾山麓の古屋敷に集住し、塗師方を中心とする製造業者は堀川の北の西の濱から南の南の濱にかけて分布する傾向がみられる。また、幕末から明治時代にかけて、堀川沿いには町の主要な建物や地域社会の実力者の家屋と共に、漆器問屋を中心にした漆器関係家屋が建ち並び、特徴的な町並みを形成していた。